
真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

龍崎竹虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

【Nコード】

N8699Z

【作者名】

龍崎竹虎

【あらすじ】

ロシアクォーターで金髪が特徴の少年、南雲なぐもひたち月出はある日、義父に促され川神学園に編入することになった。

武神と謳われる川神百代が居るからと渋っていたが、義父の熱意に負けて渋々2-Fに編入する。

面倒くさがり屋だが根はお人好しなため受け入れられていく月出だが…？

金髪少年の明日はどっちだ！

ちなみに他のヒロインとフラグが立ちつつもヒロインは一貫して燕

予定。

台本形式になることもあるかもしれない……。

第0話 オリ主設定（前書き）

一度打ち切った過去があるので、今度こそちゃんと書きたいと思う
今日この頃。

第0話 オリ主設定

「喧嘩っ早い奴って頭ん中どーなってんだあ？ ああメンドくせえ

……」

南雲なくも 月出ひたち

CVイメージ 梶裕貴（『ロウきゅーぶ！』長谷川昴の声）

武士テーマ 「静」

身長 175センチ

血液型 AB型

誕生日 7月22日 かに座

一人称 俺

あだ名 ヒタチ 夜叉

武器 拳 日本刀（銘は水面月出みなもひたち）

職業 川神学園2-F 燕宅付近のアパートで1人住まい

家族 義父1人 義妹1人

好きな食べ物 松永納豆 白米

好きな飲み物 緑茶

趣味 オートバイでツーリング

特技 料理（プロ級）

大切なもの 家族

苦手なもの 面倒くさいものは全部

尊敬する人物 義父

必要以上には口を開かない寡黙で面倒くさがりな性格の少年。
頭脳や知識が高いが競争は面倒くさいということで2-Fに編入する。

松永燕は6歳くらいの時から義父が松永久信の知り合いということ

で面識があり、向こうから興味を持たれていた。ある意味幼馴染のような関係で、彼女に対しては自分の意見を通そうとする分、割と寛大にしている。

結果燕には懐かれていて、結構な頻度で振り回されることが多いが、特には気にしていない。

世の中を何処か冷めた眼差しで一線引いたところから見ている節がある。

他人とあまり関わろうとしないが、何処か人を惹きつける雰囲気を持つており、話しかけると大概はちゃんと答えるので、人に嫌われるような器ではない。

自由奔放でマイペースな性格であるが、他人に振り回されることが多々ある。それでも「メンドクせえ」の一言で終わらせるし、本当は案外お人好しかもしれない。

彼が12歳のころに両親が行方不明になり、父親の友人だった現在の義父の夫婦に息子として迎えられた過去を持つ。

ちなみに義母も中学3年生の時に死去している。ちなみに12歳になる義妹がおり、多少は可愛がっている。

父型の祖母がロシアハーフだったため、彼はクォーターである。

小さいころから様々な武道を教え込まれており、剣道は我流で貫いてきた。

14歳のころに義父が打った日本刀、水面月出を授けられており、帯刀許可も特別で受けている。

が、「こんな物騒なものはあんまり持ち歩きたくねえ」とは本人談。刀を使う際は燕返しを得意とする。

徒手格闘バリ・トゥードの才能もあり、燕とよく鍛錬していたのでこちらも強い。ただ、燕同様に戦った回数は少なく、未知数なものでもある。

川神百代などに再三再四勝負を挑まれるが、「メンドクせえ」と一蹴するのが常である。

容姿のイメージ

白っぽいプラチナブロンドの髪で前髪は少しだけ長く目は隠れ気味。後ろ髪も男にしては長めだが、ブロンドが様になっている。

顔立ちは東洋系の作りだがパーツが整っている。瞳の色だけはクォーターの血が色濃く青色だが、前髪ですこし隠れている。

首に黒い革製のチョーカーをしており、トレードマークになっている。

着やせするタイプで、肌の色も白人系クォーターなので白っぽい。戦闘になると前髪はヘアピンでとめて分けるようにする。

第0話 オリ主設定（後書き）

主人公は実は良い人みたいな感じで書いていけたらなど。

プロローグ 編入……だと？（前書き）

プロローグを更新します。

三人称で小説書くのが久しぶりすぎる件について。

プロローグ 編入……だと？

ブロオオオオオ

愛知県の名古屋から東京都までを結ぶ東名高速の東京方面の道を猛スピードで飛ばす1台のオートバイがあった。

鮮やかなメタリックブルーの車体が日光を反射させ、金属特有の強烈な光を放っている。

そのバイクの搭乗者のまたヘルメットと上着の間からプラチナブロンドの髪が覗き、風に任せて自由に揺れている。

日本人離れた生まれつきらしい金髪はもちろん注目を浴びやすいもので、この絶妙なコントラストを醸し出す一人と一台はそれに例外なく一際視線を集めていた。

……のだが。どうもこの搭乗者が醸し出す雰囲気は“異常”であった。

遮光のバイザーから少しだけ伺うことのできるガラス細工を模したような青色の瞳は活気ややる気と言った光とは無縁なもので、むしろ無気力や不機嫌などのマイナスなものを感じさせる、無機質な死んだ目言える。

そんな目をした彼南雲月出は、予想通り不機嫌であった。

その原因は2週間前まで遡ったところにある……。

2週間前……。

「川神学園に編入しろ。なあ？」

いつもよりも1オクターブ程上の裏声のような声が出てしまったのは、月出自身も自覚していた。

自分が行くはずのない無縁な場所に行くように命ぜられたとき、人

はこんな声が出るんじゃないだろうか？

今の彼の姿は突然辞令を突き付けられたサラリーマンのようにも見えないことはない。

「どついうこつた父さん。なんで俺がああ、かの有名な超人学園に編入することになったんだよ？」

先程の間抜けな声とは違い、普段通りの冷めた声なのだが、何処か嫌味のように聞こえるあたり、彼は多少怒っているようだ。

「いや、別にすぐに行けと言ってるんじゃないよ……そこじゃねえよ。な
んで行くことになったのかってことだろうが」鉄心先生に頼まれたんだ

“父さん”と呼ばれたダンディズムを体現したような肉付きの良いオールバツクの男性は最初は静かに切り出したものの、途中で遮られて後はため息を吐いてから呆れたように言った。

ちなみにこの男性は月出の義父なのだが、まあこの話は別の機会に語るとしよう。

「鉄心の爺さんが？ そりやまたなんでだよ？」

先程から会話に登場している“鉄心”なる人物。

日本有数の武道流派、川神流を取り仕切る超人とも言える格闘家であり、彼の編入先と言われた川神学園の学長でもある川神鉄心という人物である。

月出は父からそう言われ、5年前に一度だけ会った、どこことなく隙のない老人の姿を脳裏に思い出す。

「鉄心さんのお孫さんの、百代さんが居ただろう？ 確かに腕が立つんだが、あの娘の場合強すぎて戦う衝動が抑えられないようですね。気軽に手合せできる人物を探しているらしいんだ」

“百代”という単語が出た時点で、月出の眉は面倒くさそうにひそ

められた。

川神百代が話題に上ったとき、自分にとって良い話が出たためしかなかったからだ。

「それで俺に白羽の矢が突き刺さったと？」

「いやその表現じゃ痛そうだよ……。まあ良いや。とりあえずしよ
うゆうこと」

何処かで聞いたことのあるネタで返され、この場面での父親のセ
ンを疑った月出だが、敢えて突っ込まないあたり彼なりの優しさ
というものなのかもしれない。

「で、君はもちろん行ってくれるよね？」

ダンディさからかけ離れた満面の笑み。初老の男性特有の優しげで
人好きのする笑みで父親は訊ねた。

「だが断る」

先程の満面の笑みのまま、父親の表情は液体窒素に漬けられたか
ごとくフリーズした。

背中には冷や汗が滝のように流れている。

「頼むよお。2週間くらい時間あるからさあ」

「2週間もありや充分だ！ さっさと電話入れて断ってこい！」
自然と月出の声も大きくなり始める。

「でも、松永のこの燕ちゃんももうじき川神学園に編入するら
しいよ？」

先程まで不機嫌なオーラを全身で出していた月出が嘘のようにお
たしくなった。

その理由に一つ、彼は“松永燕”という人物に信頼を置いていた
からだ。

自分の幼いころから慣れ親しんだ女性で武道の腕も強く、自分が戦
った中で認めることのできる存在。そんな燕が編入するならまあ百

代から受ける被害も減るだろうと踏んだのだ。

「それなら別に2週間後、受けてもいいぞ。燕が来るなら負担減りそうだし」

父親はフリーズから解き放たれ、再び笑顔をぱあつと輝かせる。

「君は本当に素直じゃないなあ。燕ちゃんが好きだからそんなに行きたくなかったのかい？」

息子の弱みらしい部分を発見したことを喜んだのであろう。

たがしかし、一般的にそれだけはやってはいけないということがある。

その内には月出をからかうということも含まれていた。

「じゃあまず2週間の期間の内に、あんたを甚振いたぶらないといけないな」

月出の笑みは、それはそれは、言ってることは真逆の、見る者を釘付けにさせるような素敵なものだった。

「なあ父さん。サファリパークのライオンゾーンに生肉のジャケツト着せて入れられるか、マグロ漁船に縛り付けられて遠洋漁業に出るか、どっちが良い？」

父親は本日二度目の冷や汗を流し謝罪したが、その数秒後、ダンディズムとはかけ離れた情けない悲鳴が上がったらしい。

……というようなりとりがあつたわけで、渋々ながら月出は新しい生活場所の神奈川県神奈川神市に向かったのだ。

あの後、結局彼のむしゃくしゃした心は少ししかおさまらず、周囲のドライバーたちを震え上がらせる今に至るわけだが……。

「お、次の出口で高速降りるか」

実はそれももう消えかけていた。

彼は新たな場所に、少し心を躍らせていたのだから……。

京都の某所

「????」月出君が居ないとつまんないよー!!!」
「黒色のロングヘアをした美少女がそう叫んでいたんだとか。」

プロローグ 編入……だと？（後書き）

最後の人は分かりやすいですね。

というがこの回にも名前出てきてたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699z/>

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

2011年12月28日00時54分発行